

四天王寺学園短大 大川原千鶴

1. 前回浮世絵に現われた被服第3報・羽織およびコート類と題して研究発表を行なったが今回は、その2としてつづけて報告する。

2. 現存する浮世絵の中から火事羽織，半天，合羽，被布等を抽出して，作期，作中人物の性，年齢，職業等よりこれらがいかなる時代背景の下に発展したかを究明した。

3. 火事装束は明暦の大火以後に大きな発展をみたものと考えられるが，江戸時代の火消しは男の中の男とたたえられただけにその用いた被服も火事場においてはもちろんのこと，平常着にいたるまで粋をこらしていたことがうかがわれた。女性の羽織は天保年間にその着用を禁止されているが着物の上から「はおる」ことの着装上の便利さを経験した者がこれにかわるものとして半天を愛用し，その流行をみるにいたった。またコート類については信長，秀吉の輸入品愛好熱が国内に南蛮服飾品の流行をきたし特にマントの輸入は合羽，引回しとして広く用いられ，これが日本の着物にうまくとり入れられることとなって袖付きコートも出現し，現代用いられている和服コートの基礎をなした。

なお，服飾品として新たに出現した「ボタン」も見のがせられないものの一つである。